HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	趣旨説明
著者	手塚，薫；TEZUKA，Kaoru
引用	北海学園大学人文論集(65)：2-7
発行日	2018-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

趣旨説明

手　塚　　薫

紅葉の盛りで行楽のシーズンですが，朝から冷え込む中，会場に足を運んでくださったみなさまに心よりお礼申しあげます。前方右側に展示ケースがあります。北海学園大の学芸員課程受講生が展示と案内の仕事を率先して分担してくれています。人文学部の教員手塚薫と申します。本日司会を担当します。このシンポジウムを企画した手前，趣旨を簡単に説明させていただきます。

武四郎ほど毀誉褒貶の激しい人物も珍しいのではないでしょうか。山川出版社の高校日本史の教科書「詳説日本史B」にも一度も登場しません。評価が一定しないからなのかもしれませんが，大学生など現代の若者がよく知らないのも無理はありません。しかし，現代においてはメディアなどによって非常に好意的に扱われているようです。

「えっもう150年経つの？」このポスターには武四郎が大きく取り上げられています。北海道総合政策部に北海道150年事業室があり，「みんなでつくる北海道150年事業」を展開中です。その趣旨は，「北海道」と命名されてから150年目となる2018年を節目の年として祝うとともに，未来を展望しながら，互いを認め合う共生の社会を目指して，次の50年に向けた北海道づくりに継承していくことにあります。

この写真は10月に学生と一緒に新ひだか町で文化財の保全・活用の実態を見る機会があった時に撮影したものです。シャクシャインのチャシがあった場所で慰霊祭が実施されます。いわばアイヌの聖地に「武四郎の記念碑」も設置されているのに気づきました。この石碑を新ひだか町アイヌ協会が設置したことに示されているように，「異なる文化を認め，共に歩んでいく武四郎の姿勢」への肯定的な評価があったことは否めないでしょう。

この二つの事例について，アイヌ文化や社会に対する武四郎特有のヒューマニスティックな視線を民族共生やアイヌ民族の誇りを尊重するためのイコンとして活用するだけなら，武四郎の蝦夷地調査の今日的意義を正確に捉えることはできません。今回のシンポジウムテーマで扱う，光と影のうちの「影」の部分の伏線になります。

ただ，双方のバランスをとって眺めることは，武四郎の業績を何ら損なうものではないということも付け加えておきます。武四郎が何故に蝦夷地調査を思い立ったのか？　その動機の解明なくして武四郎を語ることはできません。憂国の志士としての側面が浮かび上がります。そうした危機意識があったことを認めるところから武四郎の論議をスタートする必要があるでしょう。

武四郎の日誌をみるたびに奇妙な既視感（デジャビュ）にとらわれます。それが何かというと，一見遠回りなりますが，かえって今回の趣旨説明が鮮明になると思いますのでしばしおつきあいください。

米国第３代大統領トーマス・ジェファーソンが派遣した北米史では著名な 40 人の隊員からなる「ルイスとクラークの探検隊」という歴史的事実がありますが, 武四郎の調査との著しい類似についてまとめたスライドです。

この探検隊はセントルイスを 1805 年に出発し，ミズーリ川を遡り，コロンビア川から太平洋にいたるルートを開拓しました。武四郎の調査も決して少人数のものではありません。後半３回の蝦夷地調査は幕府の雇いとしてのオフィシャルなものです。前半も水戸藩士らとの関係が深いわけです。かならずしも個人的な関心のみで実行されたものではありません。

１．領土権獲得競争と国境問題

ルイジアナの西方に広がる広大なフロンティア領域をロシア・イギリス・スペインに先駆けてアメリカが占める必要があったことがルイスとクラークの探検隊の目的です。一方，松前・蝦夷地が幕府に直轄されるいわゆる前期幕領期（1799～1821）のあとで松前藩が復領を許された期間（1821～1855）に武四郎の前半の調査が実施されますが，ロシア船の出没な

ど対外的な危機感から，松前藩から領土をふたたび取り上げ，幕領化を図る必要性があるというのが武四郎の基本的なスタンスです。

２．交通路のない内陸部をめぐる苦難の旅路の連続

ルイスとクラークの探検隊の場合，出発から帰着まで２年４ヵ月を要しています。

３．先住民など多くの人びとの協力が不可欠

逆に言えば，彼らの協力がなければ調査は成功しなかったでしょう。実際に心温まる交流のエピソードもあります。先住民との関係は意外にも基本的に良好でした。ショショニー族先住民女性サカジャウィアが途中から参加して女性ガイドを務めます。

４．さまざまな地誌情報（産物・資源・人口・地図）の入手

こうした情報に基づくことによってその後の開拓が円滑になりました。

５．不可逆的非対称性が特徴

支配･被支配の構造（非対称性）が前提という意味です。ルイスとクラークの探検隊の場合は，各地で出会った先住民に狩猟をやめさせ家畜を育てさせること，農業・家内工業をおこなわせ文明に導くことをよりよい生活を保障することと信じて疑わなかったといいます。しばしば先住民を前にして「今汝らを支配するのは新しい父である（大統領）」というスピーチをおこないましたが，先住民側がそのスピーチの真意をどの程度理解していたかははなはだ疑問です。武四郎の蝦夷踏査にも同様にこの視点があります。幕府の「開拓」政策（定住・農業推奨政策）を賞賛する一方で，松前藩や場所請負商人の横暴を厳しく追及しました。その意味で上からの統治であり，両者ともに先住民の自発的意志を尊重するような配慮は見られません。

「三航蝦夷日誌」の凡例にはこうあります。

「寛成度のおほん難有恵に立かえりて，荒陬万里之外までも休明の余沢に浴さしめんこと」

幕府の直轄時には，松前藩政とは対照的な仁政がへんぴで遠い国土の果てまで行き渡っており，そこに立ち返ってもう一度再現しようという認識です。

それでは双方の酷似は何を意味するのでしょうか。19 世紀の太平洋の東と西で同じ現象がみられたのは偶然ではありません。北半球での欧米諸列強などによる領土分割が帝国主義的利害関係のもとで 19 世紀に進行し，その過程で期せずして異文化間交流を産み出し，未知だった北半球の地理・風土・先住民に関する新たな情報がもたらされました。そしてそれはその後の開拓のベースとなりました。いわば必然的な出会いであり，蝦夷地で偶然生じたヒューマニストと先住民との間の感動的な出会いというわけではありません。

武四郎をテーマにした展示はこれまでも北海道開拓記念館を会場に再三実施されてきました。それに伴い武四郎の評価もここ数十年で大きく変化したことがわかります。その展示会図録を素材にしてワードクラウドを実施した結果をスライドに投写しておきます。重要な用語を可視化するソフトを使った結果です。特別展示図録に 4 度以上登場した用語のみを対象にし，登場回数が多くなるほどキーワードが相対的に大きく表示されるしくみとなっています。したがって，その特別展では何が重要視されていたかが一目瞭然になります。まず，アイヌからの支援をえて蝦夷地内陸の測量・取調の結果として地図・日誌が作成されたことがわかります。また，蝦夷開拓御用掛など明治政府との関わりが「辞令」の形で例示されます。武四郎の顕著な業績を中心にした展示構成です。

それから 16 年経った特別展では武四郎と周囲の人物との関係に比重が移っています。尊皇攘夷論とも関わりの深い水戸学・藩，憂国の志士などが数多く登場し，小野湖山など安政の大獄に連座している人物とも交友があったことがわかります。詩歌書画短冊も目を引きます。川喜田石水は伊勢国津の豪商で書簡のやりとりがありました。たんに武四郎の多趣味の側

面をあらわすだけでなく,彼をとりまく社会や思想の動きを伝えています。さて，来年の生誕200周年（2018年）には三浦泰之氏が中心となり，北海道博物館で武四郎に関する三度目の特別展が開催されます。

これから三つのコンセプトを踏まえながら，基調講演，パネリストからのコメント，ディスカッションに入っていきます。敬称の「さん」はミュージアム関係者，先生は大学の教育者という使い分けです。

① 北海学園大で武四郎のシンポジウムをおこなうのはなぜか？

この素朴な疑問に対しては，北駕文庫のなかに武四郎自筆の史料が多くあるからと答えるほかありません。残念ながらこのことは学内ではほとんど認知されておりません。今回大学創立後初めて武四郎の自筆稿本を公開する（事実上本邦初公開です）ことになり，保存・展示ケースを新調するにあたっては，認知されていないがゆえに大変な苦労があり，人文学部長と図書館長のご尽力が必要となりました。

② 武四郎と彼をとりまく社会ネットワークに焦点をあてます。これが本日のメインになります。最新の研究成果がここに集約されているといっても過言ではありません。これまで偉業をなしとげた個人の行動や業績を説明する上で，個人の信条や努力，性格などの資質だけにスポットライトを当てることが一般的でした。しかし，人々はつながっているのだから親しい人々からなる社会ネットワークを通じた影響も無視できないほどに大きいわけです。双方向に影響を及ぼし合う人間関係，すなわち武四郎の社会ネットワークの全体像を重視したいとおもっています。まさに地道で根気のいる研究を積み重ねてきた三名でなければ語ることのできない領域です。

③ 新しい武四郎像の構築　博物館学芸員・研究者として，大学教育に携わる者として

北駕文庫コレクションと泰山荘はかつての冬の時代を経て文化財として認知されるようになり，将来の世代への継承へとつながることでしょう。

先ほども紹介した来年の北海道博物館特別展「幕末維新を生きた旅の巨人　松浦武四郎」，あるいは2020年に白老にオープンする国立アイヌ民族博物館で，どのような武四郎像が表象されるのか今から注目し，楽しみにしていきたいところです。

今回前方右で展示している史料は研究資源としてだけでなく文化財としての価値も併せ持っています。これに関連して二つのスライドをお見せし，趣旨説明の最後とさせていただきます。

泰山荘とは六つの建物群の総称で，武四郎の関わりとしては，一畳敷があります。これは1886年に武四郎の書斎として神田五軒町の自宅の東側に増築されたものです。日本各地を歩き回ってつくった人脈を通じ，全国の古材（鶴岡八幡宮，出雲大社，熊野本宮大社等）を取り寄せてつくられています。所有者もかわり，1950年に三鷹に新設されたICUが買い取り現在にいたっています。教員用の住宅・学生会館として利用された過去もありました。教員の子弟の身長の伸びを刻んだ柱の傷もそのまま残っています。ずさんな管理が続く冬の時代もあったといいます。その後泰山荘自体の価値が再認識されるようになり，1999年に国登録有形文化財となったのを機に教職員学生一同によって「泰山荘プロジェクト」が発足しました。茶道部や学芸員課程受講者によって日々の清掃やICU際の公開行事も運営されています。本年は10月21日で，私も拝見いたしました。学生がガイドツアーを実施してくれました。広大な公園内にひそむネコやアライグマ，ハクビシン，シロアリによる脅威にさらされています。虫害管理を徹底し，赤外線カメラも設置して状態をチェックすることがかかせません。言うは易く，実行するにはたいへんな苦労がともないます。保存と活用を両立しているICU関係者にこの場を借りて心より敬意を表します。

翻って北海学園大学の北駕文庫の貴重なコレクションもただ収蔵するだけでは学内外の人びとに認知されず，やがて忘れ去られる存在になるのではないかという危機感を抱いています。文化財の保存と活用の重要性についてもご意見をうかがいたいと思います。